

雲井昭善博士古稀記念

仏教と異宗教

浅野玄誠

本書は、雲井昭善博士の知友にして内外に活躍される多くの学者が、博士の古稀を記念して編集献呈されたものである。B5版七百三十ページからなるこの論文集には、目次を一瞥したため息の出る程著名な学者四十二名の論文が収められている。中には Ernst Steinkeller, Lambert Schmidausen を始めとする十名の海外からの寄稿を含み、正にインド学仏教学会の国際的な位相における一大モニュメントの観を呈している。

雲井博士は大谷大学に学ばれる一方、一時ウィーン大学インド学研究所客員として渡欧され、故フラワルナー博士のもとで学問の研鑽をつんでおられる。その活動範囲の広範さと人柄によって内外に多くの学問的知友を持たれ、今回の記念論文集に結実したということは、雲井博士の人徳であると共に、そうした資産に触れる機会を得る我々にとっても大きな慶びである。

また本記念論文集には、二つの大きな特色がある。それは一つに掲載論文の研究領域がインドの古典思想から日本仏教に至るまで広範なものであること、いま一つは、編集の当初より一貫してこの論文集が「仏教と異宗教」というテーマを持っていたことである。このことは雲井博士の長年に亙る価値ある研究

の学問的関心に纏わって、必然的に帰納した一つの「事件」であり、我々はそこに学問の在り方、宗教研究に携わるものの姿勢を学ばねばならない。それは雲井博士が、早い時期渡欧され、フラワルナー博士に学ぶことによって、日本の伝統的仏教研究とは一線を画す方法論を身に付けられたことと無縁ではなからう。

既に記した如く、本論文集は広範な研究領域をカバーし、執筆者も歴々たる布陣である。もとより筆者の如き若輩に、その逐一を紹介することの叶わぬ大作である故、大まかな内容と筆者の関心の及ぶ限りでの紹介に留まることを、雲井博士および執筆者各位に御寛容頂くよう願う次第である。

さて本論文集の内容紹介に先立ち、我々は「仏教と異宗教」なるテーマが如何なる意図のもとに付されたかを確認しておくなければならない。幸い本論文集には雲井博士御自身の論文が巻頭に掲載されており、その序に同博士の所感が記されている。博士は本書における「仏教と異宗教」というテーマが、仏教という宗教と他の宗教との関わりという、宗教学もしくは宗教史、或いは比較宗教学のジャンルにおける命題に終始する姿勢に留まらないことを宣示されて後、いくつかの具体的な事例を挙げておられる。博士が述べられる如く、仏教（仏教に限らず全ての歴史上の思想）はその出現以来、異宗教との関わりの中で新宗教としての独自性を模索し、構築していった事実を否定できない。仏教の歴史上の発展、変遷過程においてもそれはいい得るのであり、こうした歴史的現象が、仏教（及びそれに関わる

インド思想全体)を血肉化し生き続けさせたところができるであろう。そうした認識があれば、「仏教と異宗教」をテーマとするということは、単に異宗教間の交渉を証し、論難応答の解析による個々の学派の歴史的事実を確かめることに留まらない。そうした客観的な観察から一歩踏み込んだ位置において、仏教(及びインド思想全体)が対決、融和といった歴史の変遷を通ずる内面的思考への覚醒の連続、すなわち緊張状況の継続を果たし、真の思想として存在し続けた事実になが身を置こうとする主体的試みであると理解することができよう。

以上を確認したうえで内容の紹介に入りたいと思うのだが、本論文集には仏教と異宗教との関係を直接視座に据えた論文が七編みられる。もとより筆者は、「仏教と異宗教」というテーマが直接的に仏教と異宗教との対比、交渉を扱うことを意味すると考えているわけではない。しかし全四十二編中七編に、かかる形式の論文がみられることは、この論文集のテーマの設定による影響であると思われ興味深い。

雲井昭善「仏教と異宗教—ヨーガ学派と仏教との交渉—」、渡辺重朗「ニヤヤー・ブーシヤナに引用されたチャールヴァーカ説—古典インドの詭弁術—」、真野龍海「初期仏教とウパニシャッド」、玉城康四郎「仏教と他の立場との対比・交照—クリシュナムルティの場合—」、藤田宏達「浄土思想と異宗教の問題点—アミターバと光明思想—」、神子上恵生「実在論者の唯識説批判—*samanantarajāna* 認識対象説をめぐって—」、
がそれに当たる。

この内、雲井論文は、「ヨーガ・ストトラにおける自在神」大谷学報 51:1, 56, 「禪定と三昧—仏教とヨーガ派との関わり」仏教学セミナー 23, 51, 「自在神への祈念 (*tsara-pra-ñidhāna*)—」ヨーガ・ストトラ』における」奥田慈応先生喜寿記念、仏教思想論集 51, 「原始仏教資料におけるヨーガの概念」仏教研究 9, 53 等、仏教に特に関係の深いヨーガと仏教との一連の相互研究を踏まえてのものである。

仏教とヨーガとの相互研究にあつては、ヨーガ(特にヴィヤーサ)の思想的傾向に即して、二つの道筋がある。これは本論において雲井博士ご自身が指摘しておられることでもあるが、第一にヨーガが仏教の教理もしくは思想内容と対決・批判する中に、ヨーガ学派の学派としての主体性・独自性を明らかにしてゆこうとすること、いま一つは、ヨーガが仏教的思想を自説として採択し、自らの学派内で自家薬籠中のものとして消化した文脈の中にその真意を探ること、である。

前者に関連して、対象と心との関係、実在論をめぐる外界の対象と認識作用の問題、真我の存在をめぐる論争、ヨーガ学派における心の位置づけ、が検討されている。後者に関わる素材としては、四種の等至(有尋等至、無尋等至、有伺等至、無伺等至)、無明、四種の業と業の果報、苦観、五根・五力、四無量心、ヨーガ行者の九つの段階(仏教の九品の階位との関係)、智慧(四聖諦との関係)、転変(三世実行説との関係)、時間論等を取り上げておられる。

小結と断つた上で雲井博士は「ヴィヤーサが有部の四論師

説を援用して、サーンキヤ哲学に源流をもつヨーガ学派の転変説を解釈した背景には、彼のヨーガ観とその理論武装として世親の『俱舍論』的仏教があったことを指摘できる」(三十一頁)としておられる。ただし誤解のないように、實在論的立場を採る建前から、ヴィヤーサが刹那滅論や無自性論に関しては世親を批判した態度を根柢に、経量部的立場を却けている事例の指摘もつけ加えられている。

長いヨーガ研究の集成として興味深い視点を提示する論文であるが、私的な感想を付け加えさせて頂くならば、本論にはヴィヤーサ以外にヴァーチヤスバティミシュラ、ヴィジュニヤーナ・ピクシュ等の内容的租借はみられるが、具体的指摘による例示・論証が少ないのは残念である。そのことは、『ヨーガ・ストトラ』とヴィヤーサ、あるいはその他の註釈家、そしてヨーガの理論母胎となったサーンキヤ相互の曖昧な同質化に結果し、結論を不鮮明にしている恨みがある。博士ご自身、序において「南・北両伝の伝承という仏教伝播の地域的限定は、仏教内部にあってさえ教義上の理解・解釈をめぐって微妙な差異を生みつつも、相互交渉という体裁をとらざるを得ない現実を生んだ。かくて、いわゆる原始仏教から部派仏教、更に大乘仏教というインド史の流れの中で、仏教の内部自体においてさえ複雑な絡み合いを余儀なくさせてしまった」(四頁)と述べておられることを、そのままヨーガやサーンキヤに流用するならば、同一学派内においても異説の輩することは自明の理であり、その分限を正さずして他学説との交渉を語ることはできないと思

うのである。

いずれにしても、小異に抱泥することを避ければ、「仏教と異宗教」というテーマを真摯に追求してこられた雲井博士の、ヨーガを介する一連の研究の集成として価値の高いものである。

仏教以外のインド思想を扱った論文としては、シャイナ教関係に中村元「中世シャイナ教の実践論—概観」、長崎法潤「シャイナ認識論における arhakti」¹⁾、宇野惇「シャイナ教認識論の一研究—「再認」pratyabhijñānaをめぐって—」の三編²⁾、それ以外のインド思想を論考するもの、原實「Yoga Sūtra III—37」、前田専学「解脱への道—スレーシュヴァラ著『ナイシトカルムヤ・シッディ』第一章(一—四四)の邦訳と注」、村上真完「シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド第一章考」、金岡秀友「西・南インドのヒンズー化—石窟寺院建設史を通って—」³⁾、George Chemparathy「Three Cardinal Theses of the Nyāya-Vaiśeṣika Concerning the Validity of the Veda」、Albrecht Weiler「A Note on Mahābhāṣya II 366. 26: *gunasampādno draṅyam*: Studies on Mallavādin's Dvādaśānāyacakra II」⁴⁾六編が収録される。

シャイナ教研究は近年、日本におけるインド思想研究にあつては、仏教との関連を前提として必須の課題となっている。

「仏教と異宗教」というテーマも、単に仏教と他学説との直接交渉のみが問題とされるのではなく、仏教と関わりの深い他の宗教・学説が、同じ時代、同じ土地にどのように生きたかを問うことも大きな役割を担っている。そうした意味において本論

文集が、宇野惇、長崎法潤氏といったジャイナ教研究者に加え、中村元博士のジャイナ教関連論文を掲載したことは評価に値する。特に長崎論文はジャイナ教認識論の研究に新たな視点を投じた『プラマーナ・ミーマーンサー』I.126~133の解読研究を含んでおり、後学の研究資料としての価値も高い。

同じような理由で、仏教研究者にとってもインドの伝統思想への造詣は避けて通れぬ問題であろうが、それは本論のテーマ「仏教と異宗教」においてもいろいろのである。

原論文は、『Yoga Sutra III-37』を捉え、それに連関する章句を蒐集することによって、ヨーガが、一方においてインドの民間信仰として汎く知られていた行者の神通力に彩られたシャーマンの要素を踏まえながら、他方それらを論理的に洗練し、脱魔術化、脱神話化しようとする課題を読みとろうと試みている。本論文の特色は、広範な領域に及ぶ原博士の学識が如何なく発揮されているところにある。たゞねはYS III-37の三昧(samadhi)と出定(vyutthana)に關説(くわんげつ)のvyutthanaの語義をMahabharataに見定め、samadhiとvyutthanaの対照をよめる類似の文脈を、後世のPrabodhacandrodaya, AbhinavaharatiやVedantasastraに拾うが如くである。文献の扱い方が、形式的範疇、思想的時代性等に限定されがちな日本のインド学研究の方法論を超えていることは、原博士自身詳細な註記に指摘されるように、H. Jacobi, G. Oberhammer, S. Radhakrishnan, M. Bloomfield, S. Dasgupta, V. M. Bendekar, T. Gelblum, E. W. Hopkins などの邦外の碩学の成

果を多く参照しておられるからであろう。仏教学研究と異なりインド学研究は、まだまだこうした海外の業績に優れたものが多く、特定の資料、特定の領域に束縛されない博士の姿勢は、多分に啓発的である。ただし、本論文の如く、例証の蒐集により特定の学派の思想的方向性の類証を行おうとする研究にあっては、本稿は小編のため類例の紹介が少ないのは残念なところであるが、インド思想研究の方法論的提案として、考えさせられるところ多い論文である。

対称的に、資料の扱いに思想的・時代的な制約を与えて綿密な研究がなされているのが村上論文である。村上博士はサンキヤ研究にあって、その緻密さと斬新さにより学界に新たな六派哲学研究の方法論を提起された学者であるが、本論は博士の関心がより古い時代に遡り、六派哲学を醸成したウパニシャッドに向いていることを窺わせるものである。特に六派哲学中最も古い起源を有するサンキヤ哲学の、学派成立以前の問題点を探求する意図をもって、難解な『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』の解説に当たっておられることには敬意を表したい。前半は「1-1, 1-2」における「世界の原因、我々の生存をあらしめている原因に対する問い―懷疑」とその問いかけへの解答の研究であり、後半は「1-3と1-4」にみられる「謎の数字」を含む詩節の解明にあてられている。博士は後半の論究に五つの註釈を参照され『サンキヤ・カーリカー』とその註釈類及び『タットワ・サートサ』との相関の元に独特の緻密な研究がなされている。

ただし、本典考究のための関連資料は、殆どがかなり後期に属するものである。シャンカラ以降の後期の註釈家が、成熟した六派哲学体系の影響を受けていることは当然であり、ウパニシャッド本体の探求に必ずしも適切な資料とはいえない。特に学派成立以前のサーンキヤ史を探ろうとする場合、傍証として古い時代の関連資料の参照による新しい方法論の導入が欲しい。その結果、結論が研究対象となったウパニシャッドの「示唆する諸の術語はSKよりもむしろTsにある」ことによつて「TsがSKよりも古い作品であるか、古い素材を充分に含むとらわなければならない」(八十四〜八十五頁)と、ほとんど一事に集約されてしまひ、サーンキヤ前史の研究とどう側面に至りついでない。本論の続編が待たれるところである。

次に仏教を単独で扱った論文であるが、やはりこれがこの論文集の最も大きな部分を占めている。

初期仏教、パーリ文献を扱ったものとしては、塚本啓祥「アナンダカ派の形成と他派との論争―念処論を中心として―」¹⁾、高木神元『沙門果経』と六師外道²⁾、渡辺文麿「Vikappa, Vitalka, Vicāra ―パーリ語資料を中心して―」³⁾、川崎信定「パーリ語文献にみられる一切智 (sabbhāṇū)」⁴⁾、Noritoshi Aramaki “On the Formation of a Short Prose *Pratītyasamutpāda Sūtra*”, T. E. Vetter “Recent Research on the Most Ancient Form of Buddhism: A Possible Approach and its Results”, Heinz Bechert “Orthodoxy and Legitimation in the Context of Early and Theravāda Buddhism”⁵⁾ がある。

インド大乘、チベット文献を扱ったものに、高崎直道『楞伽經』の外教説―提婆造『外道小乘涅槃經』との関連―⁶⁾、湯山明『妙法蓮華經の蔵字音写による敦煌出土写本断簡二点覚書』⁷⁾、武内紹晃『唯識学論書における執受の二つの用例』、一郷正道『ダルマキールティとシャーンタラクスタ』、小川一乗『アラーヤ識不要論―ツォンカパの「滅存在論」―』、戸崎宏正『ダルモタラとシャーンタラクスタ―#語にもとづく知かをめぐる―』⁸⁾、Ernst Steinkeller “*Paralohasiddhi*-texts”, Alex Wayman “The Disputed Authorship of Tibetan Canonical Commentaries on the Sarvadurgatipariśodhana-tantra”, Shoryu Katsura “On *Trairkyā* Formulae”, Lambert Schmithausen “Once Again Mahāyānasamgraha I. 8”⁹⁾ の九編を数えることが出来る。

Steinkeller の論文は、論理学書や大乘經典に含まれる「他界の実証」を論ずるテキストの紹介で、五編を挙げる。

Schmithausen の論文は興味深いもので、袴谷氏の「Mahāyānasamgraha に在ける心意識説」(東洋文化研究所紀要76)への批判論究の形式を採っている。『撰大乘論』1-8に「心体第三、若離阿頼耶識、無別可得」とあるのを捉え、宇井 (note 34)¹⁰⁾、Lamotte (note 35)¹¹⁾、長尾の三氏¹²⁾、武内 (note 36)¹³⁾、袴谷氏は解釈を異にするが、Schmithausen 24 I-8 のコメントを詳細に検討することにより長尾説を支持している。

中国仏教(漢籍中心)を扱ったものとしては、立川武蔵『華嚴五教章』における四句分別―『中論』における四句分別との

比較—」Takao Maruyama “Chinese Theory of the Three Ages after the Buddha's Decease: Chinese Lotus Sūtra Commentaries”, の二点が指摘すべき。

丸山論文は、中国仏教における正像末の三時説が如何に形成され、どのように展開したかを、特に中国の法華経註釈者の理解を通して論じようとしたものである。本論文は、三時説の展開については、それが法華経の「後五百歳」説や大集経の「五五百年」説と関連して解釈された歴史を提示し、それらの法滅思想史上における重要性を指摘している。三時説の形成・成立の事情という不明確な部分に充分な論議がなされていないことは残念であるが、中国仏教における重要なテーマを扱った論文であり興味深い。

その他、日本仏教・浄土教を素材としたものに、藤堂恭俊『浄土宗大意』にみられる師弟二師の法語—法然真撰・非撰をめぐって—、高橋弘次「法然浄土教における菩提心」、Yuchi Kajiyama “Transfer of Merits in Pure Land Buddhism: Nāgārjuna, Vasubandhu, and Tan-tuan” の三点、いままで分類紹介に入り切らなかつた論文として、櫻部建『仏教聖典』所収現代語訳「大品般若経」補輯、頼富本宏「文献資料に見る文殊菩薩の圖像表現」、R. E. Emmerick “A Khotanese Version of the Sūtra of the Lord of Healing”, Oskar von Hinüber “Epigraphical Varieties of Continental Pāli from Devimori and Ratnagiri”, N. A. Jayawickrama “Buddhism in Sri Lanka: A Brief Historical Sketch” の五篇を含む。

全体としてこの論文集を見た場合、単なる記念論文集に終わることなく、「仏教と異宗教」なるテーマのもとに編集を進められたことは卓見であつたといふべきであらう。ただ、あまりに広い領域を扱つたために本来の意図が幾分希薄になつてしまつた感は否めない。それにしても執筆人の豪華さと、海外の学者に積極的に門戸を開いた編集は立派なもので、現代におけるインド学仏教学研究の進呈状況を概観できる好適な書となつてゐる。その分若い学者の気鋭に満ちた進取の論文がみられないことはやむを得ないことであらうか。

また外国語論文の海外における評価は高く、執筆したヨーロッパの学者からも、その編集の確かさに好評が寄せられているとのことである。

(昭和六〇年二月二四日 平楽寺書店 B5判 七三〇頁)
二五、〇〇〇(円)

〔付記〕

Wezler 博士より、御自身の論文を訂正したいとの連絡が入つたが、すでに出版後のことでその意志を反映できなかったとのことである。ここに訂正箇所を掲載し、読者の参考に供した。

page	line	instead of	read
3	26	ītham bhūtenāsyā	īthambhūtenāsyā
3	28	kāraṇābh havat	kāraṇād bhavat
14	9	M. II 266, 14	M. II 366, 14

14	29	M. II 200. 23	M. II 366. 23
15	1	M. II 200	M. II 366
15	23	M. II 200. 25	M. II 366. 25
17	15	M. II 200. 25	M. II 366. 25
17	18	M. II 200. 25-26	M. II 366. 25-26
17	22	M. II 200. 23-25	M. II 366. 23-25
19	2	M. II 200. 25-26	M. II 366. 25-26
22	15	M. II 200. 15f.	M. II 366. 15f.
22	17	M. II 200. 23-25	M. II 366. 23-25
29	19	māno' rikatulabhāraṅ	māno' rikatulabhāraṅ
29	42	27) nor	585) nor
33	14	fn. 44 above), p. 27.	fn. 47 above), p. 27 = 585.

「佛教学セミナー」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は、仏教学会又は文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します（一冊のみの場合、送料50円）。

1～12, 14, 22, 23号品切れ	20 号	品切れ(特集号) *	
13 号	300円	21, 24号	600円
15～17号	350円	25～31号	700円
18～19号	400円	32～38号	800円
		39～43号	1000円

* 第20号は特集号につき、別に単行本として文栄堂書店より刊行（品切れ）。
 ※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。
 13, 24, 43号は残部僅少です。